

日本も元気にする 青年海外協力隊

北陸編



世界も、自分も、
変えるシゴト。



世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる!

青年海外協力隊を経験し、帰国した人は約3万3,000人。
彼らは今、世界の諸問題に対応してきた経験を、
日本の各地で生かし、活躍しています。

このパンフレットは、帰国した隊員の皆さんが
ボランティアとして派遣された国々で
思いが伝わらない苦悩、
何かを成し遂げた歓喜、
人とのふれあいの暖かさ、
故郷への郷愁など
活動を通し感じた何かを
日本の地域社会の中でどのように生かし、
活動しているかをまとめています。

このような帰国隊員の活躍は、
世界を元気にした人は、日本も元気にできるというJICAの思いを
さらに強固なものにしています。

青年海外協力隊は、
「世界も、自分も、変えるシゴト」なのです。

さあ、あなたも、青年海外協力隊に
参加してみませんか。

自分を変える、シゴト。 それが、 北陸のチカラになる。

協力隊の経験を能登のチカラに

石川県七尾市 

赴任地 ▶ コスタリカ

半澤 咲子さん
(株)スギヨ 管理本部付
農業事業 農場長

P4



石川県鳳珠郡 

赴任地 ▶ ネパール

村上 成人さん
(石川県北部家畜保健衛生所・
能登駐在所)

P5



石川県七尾市能登島 

赴任地 ▶ エルサルバドル

東野奈津恵さん
(農業経営コンサルタント・
(仮称)能登島ファーム準備室)

P5



現地での気づきを生かし、
子どもの教育に
情熱を注ぐ

富山県高岡市 

赴任地 ▶ ブラジル

青木 由香さん
(富山県外国人相談員
ボランティアグループ・アレッシェ高岡代表)

P8



異国の地で気づいた
生まれ育った
町の魅力

福井県大飯郡高浜町 

赴任地 ▶ バングラデシュ

奥野 麻衣さん
(高浜町役場 政策推進室
主事 広報担当)

P10



協力隊の経験を能登のチカラに

能登半島には、あちこちで帰国隊員が活躍しています。彼らは、それぞれ協力隊員として赴任した土地で、さまざまな出会いや苦悩を経験しながら、将来の自分の礎を築いてきました。

コスタリカ
Costa Rica

エルサルバドル
El Salvador

ネパール
Nepal

自ら商品化した針なし蜂のハチミツを手につく東野さん



赴任先の学校で行われた科学研究発表会で、審査をしている半澤さん



同様の授業科教師陣員が勤務する小学校で、家畜についての授業をしている村上さん



自ら商品化した針なし蜂のハチミツを手につく東野さん

赴任中の活動

ハンザフ サキコ 半澤 咲子さん

赴任地
コスタリカ

赴任地での職種
農業（植物組織培養）

プロフィール

福島県出身。東北大学大学院農学研究所修士課程修了後、青年海外協力隊に参加。帰国後、石川県七尾市の企業に就職。



スギヨ

青年海外協力隊を目指す皆さんへ

進路を決めるときは、あまり慎重に考えすぎると前に進めないかもしれませんね。やってみて、「失敗から学ぼう、というぐらいの割り切りも必要だと思います。自分で考えた末に決めたことには、自信をもって挑戦してください。

自分の技術を生かせる就職先の一つ

大学時代に何度か海外に行っているうちに、青年海外協力隊に憧れを抱いていました。就職活動を始めると、これまで培ってきた技術を直接生かせる仕事が少ない現実を知りました。そこで、興味があった青年海外協力隊のウェブサイトを見てみると、途上国で植物培養を教える職種を募集していました。自分でどこまでできるか自信がありませんでしたが、「参加するなら今だ」と意を決し、応募しました。

赴任先は、コスタリカ北方の農業高校。そこでは、同国の主要農作物であるバナナや蘭の安定生産を目的とした植物培養技術を学ぶための実験室の開設が進んでいました。私の任務は、そのための技術指導。地道に教えていけば、分かってもらえるだろうという考えでは不十分でした。言葉の壁に加え、違う価値観をもつ人の理解を得るには、積極的な働きかけが必要でした。校長先生にかけあって授業に組み込んでもらったり、生徒との交流を増やしたりしながら技術を周知し、実験室の存在価値を高めていきました。

実験室で無菌操作をしている様子



ムラカミ ナルト 村上 成人さん

赴任地
ネパール

赴任地での職種
獣医師

プロフィール

石川県金沢市出身。高島学園大学卒業。石川県家畜保健衛生所に3年間勤務した後、青年海外協力隊に参加。帰国後も同所に勤務。



青年海外協力隊を目指す皆さんへ

私は3年間社会経験を積んでから参加しましたが、技術指導をするには、10年ぐらいの経験が必要だったと痛感しています。参加を考えている方は、「行ってしまえば、どうにかなる」ではなく、そのための準備を急入りして欲しいです。

ヒガシ ノ ナツエ 東野 奈津恵さん

赴任地
エルサルバドル

赴任地での職種
経済・市場調査

プロフィール

石川県白山市出身。北陸学院短期大学卒業後、アパレルメーカーに13年間勤務。統括マネージャーの職務を経て、青年海外協力隊に参加。帰国後、農業経営コンサルタントとして活躍。



青年海外協力隊を目指す皆さんへ

青年海外協力隊は、途上国の人と接するなかで、違う発見に「ドキドキ、わくわく、できる活動です。参加する前に、専門分野での経験をしっかりと積み、その技術や知識を伝えるだけではなく、できるように導く、信念をもって参加してください。

環境の違いから得た打たれ強さ

私の出身大学は、青年海外協力隊に参加する卒業生が多いことから、在学中から参加を意図していました。参加するなら社会で経験を積んでからと思い、卒業後、石川県の家畜保健衛生所に就職。3年間獣医師として、専門的な知識と経験を積み重ねました。

入所4年目、現職のまま派遣という形で、ネパールのバイラフに赴任。任地は畜産業が盛んで、私の任務は牛、水牛の生産性を高めるための人工授精の技術指導と不妊治療。今まで私が日本で携わってきた業務そのものでしたが、すべてが思い通りにいきません。言葉の壁はもちろん、インフラや宗教などによる環境の違いによって、日本と同じ治療法ができないのです。そんな中で、何をやっていいのかわからず、壁にぶつかるときもありましたが、常に前向きに取り組み、打たれ強くなりました。帰国直前、



カウンターパートである獣医師が、私と全く同じように、畜産技術者を指導する姿を見て、努力が実を結んだことを実感しました。

農家を巡回し、繁殖診療をしている様子

※カウンターパート＝現地で技術移転を担当するスタッフ

生きるフィールドを変えた経験

私はアパレル会社の統括マネージャーとして、複数店舗のマネジメントを手掛ける多忙な日々を送っていました。ある時、「もっと違うフィールドで成長していきたい」と考えるようになった矢先、青年海外協力隊の本と出会いました。途上国での支援活動に心が動かされ、13年間勤務した会社を辞めて協力隊に応募しました。

私の任地は、エルサルバドル。現地の養蜂グループが生産する針なし蜂のハチミツの商業化支援を行いました。任地で針なし蜂のハチミツは、薬効が高い崇高な品であるにもかかわらず、空き瓶に詰めて路上で売られている状態。私は前職で培った販売ノウハウを生かし、パッケージや価格の改善、販路開拓、帳簿整理などの技術指導を行いました。土地勘も、語学力もない中で、新たに出会う人たちとの親交を大切に活動を進めていくと、2年間で売上げが約3倍に増えました。また、私の指導が実践されている様子を目にし、自分の活動が誇らしく思えました。

イベントやフェアにも積極的に参加。食品フェアでの宣伝活動の様子



帰国後の活動

協力隊の経験を能登のチカラに

今、能登地区では、能登の魅力を見直そうとする取り組みが始まっています。帰国隊員たちも、これまでの経験を生かして、その一助を担っています。



半澤 咲子さん

▶ 職業 (株)スギヨ 管理本部付 農業事業 農場長

農業事業スタート、肌で感じた経験が生かされる

帰国後、種苗会社に勤務していたものの、どこか満足できずに新天地を探していたら、スギヨのウェブサイトで見つけた、軽い気持ちで応募。偶然にも面接で農業事業の話が出て、自分の経験を話すと採用が決定しました。

私は、同社の農業事業の立ち上げとともに入社。能登の耕作放棄地を畑にし、そこで収穫した野菜を商品に活用したり、地元へ流通したりすることが私の役割です。農学部出身とはいえ、農作業に携わるのは初めて。勉強しながらのスタートでした。ゼロからのスタートは、協力隊のときと同じ。臨機応変に対応しようとする前向きさや、人の協力を得ることの大切さなど、肌で感じた経験を生かすことができました。

耕作面積にあわせて、収穫する野菜の種類や量も増加。同時に、イベントや交流体験などを行い、活動の幅も広がってきました。今後は農業へ従事したいと思う人が、憧れるような農場を築いていきたいです。



スタッフと一緒に、タマネギの出荷作業を行う半澤さん



半澤さんはこんな人

株式会社スギヨ 管理本部付 農業事業 清酒 夕月 さん



半澤さんは、ものの考え方がしっかりとしていて、どんな所でも、どんなことに対してでも、前に進む力を持っている人です。めげずに頑張る姿には感心するばかりで、一緒に働くことに幸せを感じています。



村上 成人さん

▶ 職業 石川県北部家畜保健衛生所 能登駐在所

「能登牛」の生産拡大、能登の酪農家を支援



慣れた手つきで、受精卵移植をする村上さん

石川県では、県のブランド牛である「能登牛」の生産拡大に力を入れています。私が勤務する奥能登地区は、「能登牛」の主要な生産地。一方で、地域における獣医師不足の問題を抱えています。そのため、能登駐在所の職員は、家畜の病気の診断や

予防に加え、牛の生産性を高めるための繁殖活動をサポートする役割を担っています。能登地区の和牛繁殖農家を定期的に訪問し、繁殖検診を実施。また、酪農家において、黒毛和牛の受精卵移植をすることによって、上質の能登牛の生産拡大に努め、酪農家の経営を支えています。

珠洲市は、「世界農業遺産」に認定されたことによって、自然との共生が見直されています。その中で、酪農家の高齢化が進み、後継者不足が深刻な問題になっている現状にも目を向けられませんが、不合理な環境において、自分ができることに尽力。協力隊で培ってきた「打たれ強さ」を生かし、能登で生まれ、能登で育った「能登牛」ブランドを増やし、地域の活性化に貢献していきたいです。

村上さんはこんな人

酪農家 岡田 俊一 さん



村上先生は、牛の繁殖においてとても貴重な方です。高齢化が進む能登地区の酪農家の中で、受精卵移植によって安定した経営を熱心に支援してくれています。積みやすい人柄なので、心強い存在です。



東野奈津恵さん

▶ 職業 農業経営コンサルタント (仮称) 能登島ファーム準備室

地域に支持される農園を目指す

農業に従事したいという思いのもと、帰国後、地元で就職先を探していると、能登島の耕作放棄地を再生し、農工商連携6次産業を目指す事業「能登島ファーム」をマネジメントする人材を探していることを知り、応募しました。

2011年から、3年後の本格運営に向けての取り組みがスタートしました。現在は、事業計画作成にあたって、島内の民宿や公共施設などに出向いてヒアリングをしたり、耕作放棄地に足を運んだり、現状調査に力を入れています。初めての土地でも、誰とでも話せずには接することができるのは、協力隊での経験があったからではないでしょうか。地域の人たちとのふれ合いを通じて、地域の歴史や文化、習慣などを知らることがとても楽しく感じます。能登島ファーム

設立事業は、地域の人たちの協力がないと成功していきません。会社の枠ではなく、もっと広い、地域との関わりをなかで、自分の経験が生かせるこの仕事に魅力を感じています。

初めて大豆の収穫を迎える畑に伺い、出来具合を確認する東野さん



東野さんはこんな人

農業生産法人 PaPa 合同会社 田中 むつみ さん



東野さんは、率先して視察に行ったり、人前で上手に説明したりと、私にはない積極性を持っています。東野さんが能登島ファームの設立に携わるようになってから計画が進み、彼女の貢献度は大きいです。

Special message

地域を活性化させる協力隊員の底力

金沢大学教授、学長補佐(社会貢献担当) 金沢大学里山里海プロジェクト代表 環日本海環境研究センター・センター長

中村 浩二 先生



私の大学時代の親友数人が、協力隊員としてアフリカなどに派遣されたことにはじまり、協力隊員とはいろいろなご縁があります。私は長年、熱帯域で昆虫の生態調査に従事していますが、インドネシア、パナマなどで何人もの協力隊員と出会いました。どの方も、現地に溶け込み、謙虚で、さわやかでした。

また、能登の活性化のため、私は、金沢大学「里山里海プロジェクト」を運営しています。その2大事業である「能登里山マイスター養成プログラム」と「のと里山里海アクティビティ」では、協力隊経験者が活躍しています。どの人も自立性、アイデア、協調性、活力にすぐれていると感じています。これらのかかわりから、協力隊員派遣事業は、素晴らしい成果をあげていると考えています。

『国破れて山河あり』といいますが、いまの日本は、『山河破れて国あり』ではないでしょうか。2011年3月11日の東日本大震災に直面して、国に代表される既成システムの硬直と無能が目立ちます。日本各地では、少子高齢化、過疎化による地域の荒廃(「里山里海問題」ともいえます)が止まりません。能登には、素晴らしい自然と伝統文化がありますが、一部では、集落の存続が困難になりつつあります。能登や各地の山河は、徐々に崩壊しつつあります。いま、一番必要なのは、この流れを押しとどめ、逆転できる人材、信頼感と実力を兼ね備え、ホンモノの経験をもつ若い人材です。

協力隊経験者のみなさんは、発展途上国では、人口増、乱開発による自然と伝統文化(もちろん、「近代化」が必要な、多くの問題を抱えています)の破壊が、恐ろしい勢いで進行していることをよくご存じでしょう。いっぽう、能登の衰退は、東京などの大都会への人口流失、さらにグローバリズムとリンクしており、能登の活性化は、容易ではありません。

協力隊員のみなさんは、世界の発展途上国で、ホンモノの経験をしてきました。いま能登を元気にするには、みなさんの経験と活力が必要です。ここには、チャレンジと可能性をもとめて、たくさんの仲間が集まりつつあります。能登は、人材を求めています。

現地での気づきを生かし、 子どもの教育に情熱を注ぐ

日系ブラジル人の子どもたちとのふれ合いのなかで、子どもの教育の大切さに気づく。その思いを、日本で行動に移した青木さん。日系社会青年ボランティアでの経験が、彼女の情熱の源となっています。

赴任中の活動

興味を抱いていた
ブラジルの日系社会で、
日本語・日本文化を継承

ブラジル
Brazil

帰国後の活動

外国人の
子どもの教育に
真摯に取り組む

Voice

- Q 活動に参加しようと思った決め手は？
A 日系ブラジル社会に興味があったから。
- Q 参加して一番よかったことは？
A たくさんの人と出会い、話し、一緒に笑ったり、泣いたりできたこと。
- Q 一番大変だったことは？
A 人間関係への配慮。
- Q 参加したことで何が大きく変わった？
A 「何がしたい」ばかりではなく、自分が置かれた状況の中で「何が必要か」「何ができるのか」と考え方が変わった。

ア オ キ ユ カ
青木 由香 さん



赴任地
ブラジル
赴任地での職種
日系日本語学校教師
職業
富山県外国人相談員
ボランティアグループ
アレッセ高岡 代表

プロフィール
富山県高岡市出身。大浜大学大学院文学研究科博士前期課程修了後、2005年に日系社会青年ボランティアに参加。帰国後、富山県外国人相談員と、ボランティアグループ代表の二足のわらじで外国人児童生徒の教育に携わっている。

ゼロからの教育に取り組む

私は、学生時代にブラジルの日系社会についての授業を受けてから、好奇心が膨らみ、大学院修了後、ブラジルに赴任。パラナ州にある日系日本語学校で、3歳から15歳までの日系人の子どもたちに継承日本語教育を行うのが私の任務でした。現地に行ってみると、生徒はすでに4世が中心で、家庭での会話は全てポルトガル語。日本語はほとんどわからない状況でした。そこで私は、あいさつの言葉やひらがなに始まり、ゲームや折り紙などをしながら、楽しく学べる工夫をしました。

日系人である誇りを大切にしたい

ブラジル社会において、日系ブラジル人たちは、勤勉さと教育程度の高さから高い評価を得ていて、日系人であることを「誇り」にしています。けれども、日系社会は世代が進み、日本語を使う場面や日本語を指導する人材が不足。子どもたちは、日本語や日本文化の継承が困難になっています。加えて、90年代以降続くデカセギブームなどで、日本とブラジルを行き来する子どもたちが増え、彼らの教育が分断されてしまっている現状を肌で感じ、帰国後は、日本にいる外国人児童生徒たちの教育支援をしようとの気持ちが固まりました。



日本語学校では、日本文化の伝承や音楽・美術などを通して情操教育も行っていた

深刻化する外国人児童生徒の教育問題

帰国後、地元・高岡市の教育委員会に直談判。青年ボランティアでの経験を生かして行きました。同市は、県内でもブラジル人が多い地で、ちょうど外国人児童生徒の教育支援の強化を検討しているところでした。その好機に恵まれ、外国人児童生徒学習指導講師として採用。市内の小・中学校を巡回し、日本語や各教科の個別指導をしながら子どもたちと接していると、外国人児童生徒の教育問題を切実に感じました。日本語の習得が不十分のまま、日本の学校で学ぶ外国人の子どもたちは、次第に授業についていけなくなり、学習意欲が低下。それが学校離れにつながり、自尊心まで失っているのです。現在の行政支援だけでは、不足している現状に気づきました。



生徒一人ひとりのレベルにあった学習支援



ボランティアで外国人の子どもたちに勉強を教えている青木さん

仕事の枠を越えて、子どもの教育に情熱を注ぐ

何らかの形でもっと手を差し伸べることが必要。子どもたちは日々成長していくので、「今、必要なことを、今、教えてあげなければ」という思いに駆られ、外国人生徒の学習を支援するボランティアグループ「アレッセ高岡」を立ち上げました。私と同じ志を持つ有志の協力を得て、個に目を向けた学習支援を行っています。ブラジルで、複数の言葉や文化をもつ子どもたちと出会い、彼らが社会で活躍できるように応援していきたいという思いから、教育に目覚めました。青年ボランティアへの参加は、その後の私の生き方を方向付ける貴重な経験となりました。

青木さんはこんな人

高岡市国際交流協会 事務局長
梶 正明 さん



小さい体なのに、とても情熱的な方です。私なら、ただ思うだけ終わらせてしまうところが、彼女は実行に移すので、その実行力は尊敬します。「子どもたちを何とかしてあげたい」という彼女の情熱によってアレッセ高岡が立ち上がり、私をはじめ、他の講師もみな、彼女の情熱に引きずり込まれて参加するようになりました。

青年海外協力隊を志す皆さんへ

いろいろなことに触れ、いろいろなことを感じてみてください！



興味があった日系ブラジル社会に直接触れ、いくつもの言葉や文化をもつ社会の中で生きてく子どもたちに接し、「多様性は強さ」だと感じました。いろいろな習慣や価値観、自然に触れて、ときには、壁にぶつかることもあるかもしれませんが、いろいろなことを感じてほしいです。

異国の地で気づいた 生まれ育った町の魅力

バングラデシュと高浜町。

奥野さんは、協力隊の活動を通して、ふたつの町が同じ感覚のコミュニティを持つことを知る。その経験を糧に、新しい道を拓いていきました。

赴任中の活動

現地での出会いを大切に、幅広い活動に挑戦

帰国後の活動

生まれ育った地の町づくりに関わりたい

バングラデシュ
Bangladesh

Voice

- Q 活動に参加しようと思った決め手は？
- A 1回目の応募に落ちた後、これから協力隊に参加するイキイキとした友人に出会ったこと。
- Q 参加して一番よかったことは？
- A たくさんの仲間と出会えたこと。現地の人にやさしくしてもらったこと。
- Q 一番大変だったことは？
- A 言葉の壁、宗教の習慣になじむこと。
- Q 参加したことで何が大きく変わった？
- A 地域に関わる仕事がしたいと思うようになったこと。

奥野 麻衣さん

赴任地
バングラデシュ
赴任地での職種
PCインストラクター
職責
高浜町役場 政策推進室
主事 広報担当

プロフィール
福井県高浜町出身、グラフィックデザイン関連の専門学校卒業後、ウェブサイトの仕事に5年間携わる。その後、青年海外協力隊に参加。現在は、地元・高浜町役場に勤務。

あきらめきれなかった参加への思い

高校生のときから、協力隊に参加したいという気持ちがありましたが、実際に応募したのは社会人3年目のとき。通勤電車のなかで見た青年海外協力隊の中吊り広告が、参加への気持ちを蘇らせ、2回目の応募で合格しました。

5年間勤務した会社を退職して、バングラデシュに赴任。私の要請は、貧困層の子どもたちが通う職業訓練校で、外部向けにパソコンのグラフィッククラスを開校することでした。意欲的なカウンターパートに恵まれ、赴任2週間後に授業がスタート。言葉こそ分かりませんが、パソコンを介して教えた技術や伝え、言葉はなくても意思疎通ができていました。

バングラデシュだから変わった

バングラデシュの人たちは、素直で愛嬌があり、彼らとのやりとりがとても楽しかったです。日本では、人前で話すことが苦手だった私が、ベンガル語なら恥ずかしさを感じることなく話している自分の変化に気づきました。また、現地で出会った人たちを通じて、「自分でできることをやろう」と、園工教室の開講やNGOのウェブサイトの作成など、協力隊の活動以外にも意欲的にチャレンジしました。



習得している技術とはいえ、それを異なる習慣を持つ人たちに教える難しさを実感

生まれ育った町と同じ感覚のコミュニティ

バングラデシュは、町のみんなが気さくで、毎日あいさつを交わすような小さなコミュニティ。そこに、生まれ育った高浜町と同じ感覚を感じました。高浜町を離れたと思っていた頃もありましたが、バングラデシュでは、地元を思い出し、懐かしく思うようになりました。

帰国後は、地域に関わる仕事がしたいと思うようになり、時々見ていた高浜町のウェブサイトから、偶然にも社会人募集の告知を発見し、任地から小論文を送って、採用に至りました。



広報紙の編集を委託する「高浜まちづくりネットワーク」の堀口さんと打ち合わせ



広報紙作り以外にも、町のイベントに積極的に参加

バングラデシュの魅力を町づくりに生かす

現在は、高浜町役場の政策推進室に勤務し、主に広報紙制作を担当しています。高浜は、バングラデシュと同じで人との関わりが深い町。進学・就職で一度、地元を離れたものの、また地元に戻りたいと思ったのは、バングラデシュでの生活を体験したから。そして、今は地元にながらも、バングラデシュとの関わりを持ち続けたいという思いが募り、バングラデシュ映画の上映や町のコミュニティレストランでベンガルカレーの提供、イベントでのリキシャ体験など、町を活性化させるさまざまな企画のなかでバングラデシュの魅力を伝えています。

奥野さんはこんな人

高浜町長
野瀬 豊さん



彼女は、高浜町出身で、グローバルな視野をもっている人なので、同役場の社会人募集職員としてふさわしい人材です。彼女の協力隊での経験を町のいろいろなところにフィードバックさせていこうと、成人式でのスピーチや小学校への出前講座などをお願いしています。これからの町づくりに必要な職員です。

青年海外協力隊を志す皆さんへ

いろんなことにチャレンジすれば、新しい自分が発見できます！



赴任地では、新しい自分を発見するつもりで、いろんなことに挑戦してみてください。そして活動をやりとげた後、自分でどれだけ満足できたかを確認してみてください。自己満足ではいけませんが、満足するまでやりとげることも協力隊員に求められる成果だと、私は思います。

東日本大震災

～被災地復興の力に～



2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)。世界最大級の地震・津波災害に対し、JICAは理事長の「できることは何でもやりなさい」の言葉のもと、国際協力で培った力を生かし、さまざまな支援活動に取り組んでいます。今後も可能な限り、さまざまな被災者支援に取り組んでいきます。

JICAの取り組み

1 被災者支援のボランティア活動

一時帰国中の青年海外協力隊員のJICA職員、そして協力隊OB/OG約140名が宮城県や岩手県を中心に、各自の技術を生かしたボランティア活動を展開しています。



2 被災・避難者のJICA施設での受入や物資の提供

震災直後から福島県の要請により二本松青年海外協力隊訓練所を被災者・避難者に開放しています。施設には約400名の住民が避難し、ここでもJICA職員(延べ20名)や看護師や幼児教育協力隊員(延べ9名)がボランティア活動を行ってきました。その他、人工透析が必要な福島県の患者100名の東京国際センターでの受入れや、JICA国内機関から自治体経由での物資の提供も行いました。

3 NGO・国際機関の活動支援

国連災害評価調整チームや国連人道問題調整事務所の活動支援や、日本国内のNGO団体の活動拠点としてJICA施設を提供しています。

4 義援金取りまとめ

JICAで働くスタッフ、専門家、ボランティアなど有志による義援金(合計4,800万円強)を寄付しました。

5 途上国100カ国からの励ましメッセージの取次ぎ

アジア、アフリカ、中南米、中東、欧州、大洋州から3,000件を越すメッセージを受取りました。これらのメッセージを避難場所・ボランティア活動拠点として提供しているJICA施設へ掲示しました。詳しくはJICAホームページをご覧ください(<http://www.jica.go.jp/index.html>)。

6 研究および国際発信への協力

東北大学(災害制御研究センター)などによる津波防災の専門家・研究者に協力しています。国連水と衛生諮問委員会などとの共催で、「水と災害に関する東京会議」を2011年4月28日に開催し、その成果を国際的に発信しました。



頑張れ、日本!

世界からの激励

JICAボランティアとともに活動する世界各国の同僚や教え子、地域住民から温かい励ましの声や応援メッセージが寄せられました。

コスタリカ



2011年3月コスタリカにて。在コスタリカ日本大使館などの主催で開催された震災チャリティイベントには、JICAボランティアも協力しました。集まった義援金は、赤十字に寄付されました。

スリランカ



2011年3月スリランカにて。「僕らの町も津波で被害にあったから、日本で大地震や津波被害があったことはとても悲しい。早く日本が元気になるように…」と小学生がメッセージを書いてくれました。

チュニジア



2011年5月チュニジアにて。一時帰国中で、二本松青年海外協力隊訓練所で被災者支援活動をする工藤隊員(理学療法士)のもとに、知的障害者援助連盟の同僚と子どもたちから写真が届けられました。

パラオ



「パラオは日本が大好き。日本人たちも大好き」。坂岡隊員(小学校教諭)の配属先の小学校で、毎日のように流れていた震災のニュースを聞き、日本を勇気づけるためのメッセージを書いてくれました。



受付業務

宮城県東松島市・矢本第一中学校避難所では、一時帰国隊員の小暮さんが自衛隊や教員と連絡調整をしながら、入所者の人数把握や受付業務を行っていました。



電気整備

宮城県石巻市の避難所では、元電気整備隊員の立山さんをはじめ、複数のスタッフの活躍によって、1ヵ月ぶりに明かりが灯りました。入所者からは、大歓声が上がりました。



炊き出し

宮城県石巻市・波波小学校避難所では、元自動車整備隊員の稲見さんが支援活動に参加。冷たいご飯しか食べられない避難所が多い中、揚げたての唐揚げを用意しました。

「経験」を生かして

協力隊経験を被災地の支援活動に生かしたい。彼らの活動を紹介します。



炊き出し

宮城県石巻市・波波小学校避難所で炊き出しを行う津田さん(元料理隊員)。調理ができない帰宅被災住民が多い中、1,000食の昼食を提供。黒板にはメニューが掲げられています。



物資の仕分け

宮城県東松島市・矢本第一中学校避難所で、市役所から届いた支援物資を仕分けしている隊員。避難所閉鎖が決まった後は、バザーにより物資を配給することになりました。



食事提供

宮城県気仙沼市。地震後2ヵ月が過ぎて、飲料水の確保など自炊できる環境が整っていない地域もあり、地元の方や被災地支援ボランティアの方々に食事を提供しました。